

## 目次

母はたった一日だけの在宅医療だったけれども	矢野彰教	2
歌さんのこと	新戸雅章	4
●メンバーの広場●		
今流男	藤井孝二	6
「働かざるもの、食うべからず」の本当の		
意味——前編	藤井孝二	6
ネズちゃんと私 パートⅦ／四つのやさしさ	桂 奈美	8
俳句	小山美保	8
柴田品子の世界⑥	柴田品子	11
精神科病棟日誌シリーズ③	小野智司	14
選挙／リンゴ追分／血圧計／漂う		
インユートピックス		16
イラスト・絵画・写真	柴田品子／高橋大和／細野理香／杉本知佳	
	矢野彰教／遠藤美幸	
表紙		
絵画——柴田品子		

## 「母はたった一日だけの在宅医療 だったけれども」

代表取締役 矢野彰教

久しぶりに煙草が吸いたくなって珈琲屋さんの駐車場に車を止めて、カーステレオをオンにする。中島みゆきの「六花」が流れる。

「・・・広い空の上から さまよい降りて来る 泣いて泣いてごえた 六つの花びらの花 六花の雪よ 降り積もれよ 白く白く ただ降り積もれよ・・・」

父は煙草が大好きだった。真っ白い雪景色、父が子供たちをスキーに連れてってくれた。

母の葬儀を明日に控え、思わず堰を切ったように涙と嗚咽がこみ上げてくる。

「おやじよ、恩を返したよ」

グループホーム建設後の銀行の借換えと、新規事

業「木の花ホーム秦野」の申請手続きとを同時に進めるといふ多忙の中、母が急性胆嚢炎で10日程入院、退院後は通い慣れたショートステイを利用しようとしたが、退院即の利用を断わられた。少し足腰が弱ったこともありハビリのため老健施設に預けた。が、そこで転倒し大腿骨骨折、手術後、リハビリ病院で3か月入院し、介助があればトイレに行けるところまで回復し、自宅に戻ることができた。小規模多機能施設のショートステイに週5日、週末を自宅で過ごすところから再出発した。ところが1カ月足らずで容体が悪化、また市民病院へ緊急入院に。

ココナ下で一旦入院すると会えなくなってしまう。以前、脊椎損傷の在宅支援について講義を受けたときに「在宅でやれない病はない」と言い切った講師の話の思い出し、母も在宅治療でやれないかと関係者に相談した。ケースワーカー達が連絡や調整を真摯に速やかに進め、6月18日午前中、自宅に退院。

しかし自宅に戻れてホッとしたのも束の間、日付が変わって夜半、容体が悪化。私は母の手を握り、母は死を悟ったのか涙を浮かべ、やがて文字通り息を引き取るように瞼を閉じた。88歳の人生であった。

多くの人から、コロナの状況下、自宅で見取れるなんて奇跡だ、親孝行したねと励まされた。

母は20歳代で肺結核の大手術をして病気がちだったから、父が母も含め一家4人を支えた。私も32歳になるまでこの分野の仕事が持てなかったの、父には本当に世話になりっぱなしであった。しかし1988年私が正規に仕事も持てたその年に父は急逝。退職後1年半61歳であった。煙草、コーヒー、酒が大好きであった。父は高校教師を務めあげたが、私が小学校4年生から中学3年まで毎年12月と3月に高校のスキーの合宿に連れて行ってもらったものだ。夜行バスが朝方到着すると車窓は真っ白な雪景色。

父亡き後は妹が数年、母を支え、その後は私が支えた。

父への恩を30年かけて返せた話を告別式の席でさせて頂いた。しかし「恩は返せてはいない、無限の愛を受けた者は無限に愛を返していかななくてはならない」と気付いた。

実際に株式会社インユーを起業したときの最初の株は母に提供してもらった。その元は父が働いて積

み立てた年金であった。

木の花ホーム秦野の土地も借地だったのを生前購入したものであった。

従って株式会社インユーの事業は父と母が残した資産を基に始めたということである。だから無限の愛を受けた者は無限に愛を返していかななくては

ならない。それは株式会社インユーの事業を成功させ発展させ継続していくことだ。何をもちて成功とするか、それは、ここに集い、ここを利用する者たちが、たとえ病や障がいを持っていても少しでも幸せになることだ。一人孤独にいる者が他者と共にいることの幸せに気づくことだ。そういう人が一人でも多く増えていくことが成功であり発展で、それを天国から父や母たちが見て微笑んでくれることが、私にとっての報恩である。



## 歌さんのこと

### 新戸雅章

「昔はずいぶん遊んだんでしょね」

「そんなことはないよお」

「歌次郎って名前、かっこいいですね……」

歌次郎さんはぼくが大学時代に出会ったお爺さんの名である。通称「歌さん」。姓は忘れたので、イメージから若山歌次郎ということにしておこう。

小柄で、色白で、顔立ちが整っていた。知り合った当初は、昔は役者だったのかな、だったら女形だったのかな、などと勝手な想像をしていた。名前からの連想もあったかもしれない。歳は正確に知らなかったが、見かけ六〇歳過ぎくらいの感じだった。

大学時代、ぼくは横浜の配膳人紹介所というところに登録して、ウェイターのアルバイトをしていた。ホテルのレストランや結婚式場、中華街のレストランなどに派遣され、給仕の仕事をする。今の「派遣業」の類である。

最初に一週間の研修期間があつて、先輩について配膳の方法やマナーを学ぶ。この間は無給。これを無事卒業できれば、晴れて有給の仕事に就けるようになる。

このバイトの魅力は時給の高さだった。当時の定番バイトだった喫茶店のウェイターのざつと一・五倍。一日働くと、けっこういい稼ぎになった。あの頃の日本は好景気で、働く気さえあれば仕事はいくらでもあつた。

そのアルバイト先で知り会ったのが歌さんだった。初めて出会ったのは幼稚園主催のガーデンパーティ。出席者は園児と家族あわせて二〇人余りで、派遣されるバイトは二人。その人数で準備から後片付けまで、すべて仕切らなければならなかった。

前日、ぼくのシフトを知った先輩のアルバイトは、「歌さんか……」と言つて、意味深な笑いを浮かべた。

当日、会場の園庭で初めて歌さんを見て驚いた。まさかこんなに年配の方だったとは。あいさつすると、白髪頭のおじいさんは「すまないね」と言つて、頭を下げた。

なにがすまないのかと思つたが、その理由はすぐにわかつた。歌さんは終始足元がふらついている。テーブルも椅子も、重いものはいっさい運べない。結局ぼくひとり、数台のテーブルと数十脚の椅子運びから、セッティングまですべてこなすはめになった。

先輩の笑いの意味が分かつた。

パーティが始まり、食事のサービスをしていると、隣のテーブルで急に笑い声が上がつた。見ると、歌さんが持つ皿がカタカタと鳴っている。手が震えているのだ。今にもひっくり返つてスプーンがこぼれそう。指さして笑つ子供を隣の

お母さんがたしなめていた。

あわてて皿を引き取った。結局、その後はぼくが二十人分のサービスをすべて受け持ち、まだ仕事に慣れない中、後片付けまで大汗をかくことになった。

「すまなかつたねえ」

「いや、だいじょうぶですよ、このくらい」

とは言ったものの、こんなシフトはもうこりこりだと思っただころが、それからなぜかこの組み合わせが多くなった。後で知ったところでは、みな歌さんとのシフトを敬遠するせいで、新米のぼくにお鉢が回ってきたらしい。

そんなわけで仕事はきつかったが、合間に歌さんと話をするのは楽しかった。

歌さんの前職は残念ながら芸人ではなく、板前さんだったとか。酒の飲みすぎでからだをこわしやめてから、今の仕事を始めたそうだ。

「昔、少しだけ歌手のまねごともしてたんだよお」

やはり、芸能に関係していたんだと知って、ちょっとうれしくなった。

「じゃあ歌次郎って、やつぱり芸名なんですか」

「いや、本名だよお。じいさんがつけてくれたんだよお」

なにかの拍子に、東海林太郎ばりの美声を披露してくれたような気がするが、イメージからつくりあげた偽の記憶のような気もして、おぼつかない。

はつきり覚えているのは、「すまないね」と言っただけ、片膝立ちで煙草をふかしている歌さんの姿である。その涼しい顔を横目に、不思議にあまり腹が立たなかつた。紫煙をくゆらせる姿に妙に風情があつたのと、子供の頃に亡くなつた大好きな祖父の姿を重ねていたからかもしれない。桶職人の祖父もそんな風にして縁側でよく煙草をふかしていたものだ。

「ゴホン、ゴホッ、ゲホッ……」

「もうやめといたら、そんなに吸うと毒ですよ」

「でも、うまいんだよお……」

今、ぼくは七三歳。歌さんの年をとくに越えてしまった。気力、体力ともに衰え、足元もおぼつかない。物忘れもひどい。時々変な咳も出る。それでも、みなに助けられながら、なんとか仕事を続けられている。

世の中は順送り。情けは人のためならずとはよく言ったものである。

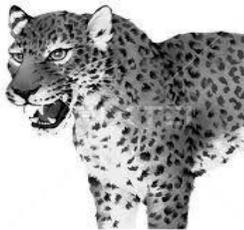


# メンバーの広場

## 今流男

藤井孝二

俺の頭はパソコンだ  
パソコンで出来てるぜYeah!!  
何でも検さく出来るぜYeah!!  
俺のハートはスマホだけ  
スマホで出来てるぜYeah!!  
インスタのせるの得意だぜYeah!!  
どうせおいらは今流男  
時代おくれのヤツラ  
NON・NON・NON!!  
今流・今流・今流  
今流男Yeah!!  
OK・Baby・Coffee  
飲もうぜ!!



0064\_00 - 0000416

「働かざるもの、食うべからず」の本当の意味

私は仏教徒ですが、前からキリスト教にも興味があり、最近、友人の紹介でクラブハウス・インユーの近くの教会に行っています。その時の牧師さんの説教がとてもよかったです。今回「フレンズ通信」に載せていただく運びとなりました。(藤井孝二)

テサロニケの信徒への手紙二 3章6節〜15節

◇ 私たちは食べていくために、つまり生きていくために、まずは何をしなければならぬでしょうか。お金を稼いで物を買うようにしなければならぬ。畑や家庭菜園のように、直接食べ物を作ることをしなければならぬ。そのように思うことでしょう。

日本の古来である縄文時代のような、まだ何もなかった頃、男たちは狩りをして食べ物を自分たちで確保して来ました。今もそれは同じです。働いてお金を稼いで、自分や家族に食べ物が買えるようにしていく。それが私たちが生きていくためにしなければならぬことなのです。しかし、今日の聖書の箇所で、怠惰な人たちがいたということです。この人たちは、「やがて救い主イエス・キリストが天から再び来られて、終わりの日としてくださるから、もう何もしなくても大丈夫だよ、主は守ってください。神よ、

食べ物を与えて支え続けてください」と、何もしなくても良いのだと勘違いしてしまっている人たちのなです。しかし、この手紙を書いたパウロはそんなことは伝えてはいませんし、実際に行動で示してもいませんでした。むしろパウロは、クリスチャンが伝道者の一人として、どのように生計を立てるべきかについて、このテサロニケの人々に身を持って、実際に模範を示して来たのです。

7節8節で「あなたがた自身、わたしたちにどのように倣えばよいか、よく知っています。わたしたちは、そちらにいたとき、怠惰な生活をしませんでした。また、だれからもパンをただでもらって食べたりはしませんでした。むしろ、だれにも負担をかけまいと、夜昼大変苦勞して、働き続けたのです。」と語っている通りです。またパウロはこのようにことも語っています。

10節『実際、あなたがたのもとにいたとき、わたしたちは、「働きたくないものは、食べてはならない」と命じていました。』と。今日の説教題はここから取りました。日本のことわざのように古くから、この日本でも言われて来ている言葉の一つだと思つたのです。その意味は「怠けて働こうとしない人間に食べる資格はないということ。働かずに遊び暮らす者を戒める言葉。」ですよ。しかし、これは病人や社会的弱者への思いやりを忘れてしまった言葉として、捉えられることが多いものとなっているのです。この言葉の本当の意味は、今日の聖書の箇所が元となっていますので、この意味をしっかりと把握する必要があります。これは怠

けている人や誤った教えから来る、間違つたクリスチャン生活を戒めた言葉であつて、いつの時代にも信者が、しっかりと心に留めておかなければならないことの一つなのです。彼らはパウロから福音を聞きました。「キリストが来られて、世はその意味を変えた。世と世のものは過ぎ去る。だから世に関わらないようにしなさい」(コリ7:31)、また「主の日は近い。だから目を覚ましていなさい」(マタイ24:42)。と。世の価値だけを求めて生きる、そのような行き方を変えて、神の国を求めなさいという勧めだったので、テサロニケの一部の信徒はそれを別のように理解したので「最後の日、主の日が来る。そうであれば、いまさら働いてもしようがない。教会に行つて主に祈り、黙想の時を過ごそう」。そして彼らは教会の人々に言いました。「私たちはあなたがたのために祈るから、あなたがたは私たちにパンを与えなければいけない」。パウロはそのような人々を怠け者と呼んだのです。

「主の日が近いとして働くことをやめ、他の人の厄介になるのがキリストの教えられたことではない。キリストは今も働いておられる。だから、私たちも力の限りに働くのだ」。そしてパウロは言います。「『働きたくない者は食べてはならない』と命じておいたではないか」(3:10)。ここに『働かざる者、食うべからず』の言葉が生まれたのです。

(以下、次号)

——瀧山浩之「聖霊降臨節第19主日礼拝説教」から

## ネズちゃんと私 パートⅦ

桂 奈美

今回は大騒動が起きました。プーちゃんが、マコと結婚したいと言いだしたのです。プーちゃんはもう三才、マコは四歳。マコの方がお姉さんです。

「マコ、キスしてくれるのにどうして結婚してくれないの?」「嫌だよ、マコはうさぎのオスと結婚するんだよ」マコは嫌がって逃げ回っています。

「じゃあ僕はクマのメスと結婚するの?」と、プーちゃん。要はプーちゃんが発情期なのです。

「じゃあ言うか」と私。「プーちゃんとマコは姉弟だから結婚は出来ないよ」「じゃあ奈美姉ちゃんとお兄ちゃんは?」とプーちゃん。「奈美と僕は他人だよ。僕も三歳の時に奈美と結婚したから、プーちゃんの気持ちは分かるけど、マコは駄目だ」とネズ。

「じゃあいいよ。マコ、キスしてくれる?」とプーちゃん。「してあげるよ。いつも一緒に寝てるじゃない。結婚しなくてもいいんだよ」とマコ。一件落着きました。ネズも私も顔を見合わせて、ため息をつきました。

「ネズ、新婚時代を思い出すね」と私。「うん、奈美、泣いてばかりいたね。何が悲しかったか知らなかったけれど」

そのネズももう六才、人間で言う二十才くらいです。時々おこられてしまいます。でもネズは私にとつていい夫です。マコもプーも可愛い子供達です。

何が起るかわからない毎日でも、楽しくて不思議な世界です。  
では、次号へ

## 四つのやさしさ

桂 奈美

ある日の出来事で私は四つのやさしさに出会った。コナで殺伐としている昨今、かすかにどれも私の心を打った。

一つは句会に行こうとタクシーを呼んだところ、タクシーの運転手さんがUターンをする時、止まっている車にかすり、「やったかな?」と車を降りて見に行き、「すみませんカスツたみたいなので、他の車を呼びますから降りて下さい」と言われた。すぐ来た別のタクシーに乗り、労働会館に着くと、「迷惑をかけたので今回は料金はいいです」と言われ、私はホロツと来た。これが一つ目。

もう一つは句会で先生用のお茶を用意していたが、先生が自分でポカリスエットを買っていたので、「桂さんお茶をあげよう」とお茶をくれたこと。先生のやさしさにホロツと来た。

次は、句会の帰りの小雨の中、ぬれながらタクシーを待っていると、通りすがりの車から女の人が「傘持っていないの? あげる」と言つて、ビニールの傘を差し出してくれた。さしてはいなかったが折り畳みの傘を持っていた私は、「いいです、タクシーを待っていますから」

とことわったが、またホロツと来た。

最後は帰りと同じタクシー会社のタクシーを呼び、運転手さんに「午前中の運転手さん、大丈夫でしたでしょうかね」と聞くと、ちゃんと連絡がついているようで、「いや、お客さんにけががなければ、それにこしたことはありませんよ。ご心配なく」とのこと。また私はこの言葉にホロツと来た。

ホロ、ホロ、ホロ、ホロと一日やさしさにふれ、良い気分で夕食を食べ、その夜は心地よく床についた。

## 俳句

小山美保

きれいな岸辺に立つは吾独り

白牡丹座れば何と言ひしかな

薄暑来てうなじに汗をかきにけり

薔薇咲きとげが痛いとかわごと

山女釣焼き食べてもこれ美味し

虹かかる美しき空見上げけり

芸を持ち左団扇の我身かな

毛虫駆除後に残るは火ぶくれや

滝行者たき火にあたりて暖を取る

想わずに噴水浴び空見あぐ

私のホームページです。

今、私が一番悩んでいる事は、体重が重すぎる事です。精神科の最後の入院で、異常に食べすぎたおかげで、今までになかった程太って、今まで着ていた洋服がほとんど着られなくなりました。動きにくくなったことが、悩みの種です。

私自身、容姿が全てではないとわかってはいますが、精神科の症状にもよくないので、まして私自身他の人に、誤ったイメージをもってほしくないのです、ホームページに私自身のことを載せようと思いました。(奈美)



上の写真は、私が31歳のころのもので、京都の哲学の道のわきにある風見鶏というショップの前のテラスで撮ったものです。写真の左奥が私です。

思い出多い中、京都は私にとって、特別なところになりました。

私の淡い青春期の大切なたからものです。

## 柴田品子の世界⑥

## 釈尊

「次は俺の番かな」と私の隣りの席で姉の連れ合いがつぶやいた。一番下の妹の連れ合いの葬儀のことだった。私の姉弟は七人（私の母は九年間に七人の子を産んでいる）なので、皆、年がくついているのである。だからこの年（私は七十二歳である）になると、いつ誰が逝くか分からないのである。皆、それぞれ死を考えはじめているのだろう。そして姉の連れ合いが言葉通りに一年ほど前に亡くなった。親戚の取りまとめ役であり、皆との接触が一番多かったので、皆感慨深かった。二番目の妹の連れ合いが言い始めた「順番」という言葉が親戚の中で流行っていた。いつ順番が回ってくるか分からないのである。皆、次は俺か、私か、と思ったであろう。私は若い頃、死の恐怖が強く、感覚的それと対峙したので、今は、死の恐怖は無くなっている。私にとつて死の恐怖を乗り越えるには、増谷文雄氏の「阿含経典」が大変役に立った。だから、今、又、その本を真剣に読み始めている。

「阿含経典」は非常に理性的である。宗教独特のあらゆる世界には絶対いかなないのである。死後の世界もあるとも言うていない。無いとも言っていない。世界は有限か無限か、靈魂はあるかなどのような問いにも答えていない。それは道理の把握に役立たず、正道の実践に役立たず、厭離、離貪滅尽、寂靜、智通、正覚、涅槃に役に立たぬからであると答え

ている。だから、学校で進化論を学んだ人たち、無神論者、無宗教者たちにも非常に良いと思うのである。

釈尊は、無常、縁起を説いている。この世に生きる者はすべてが逝かねばならぬ、去らねばならぬという原理を説くためにお出でになったのである。「この世の生きとし生けるものは、いつかはその身命を捨てねばならぬ、類なき如来、力ある正覚者、かかる師もまた逝きませるかな」そして如来は道を教えるものであると言っている。

## 縁起

比丘たちよ、わたしは正覚の前、まだ正覚を成就しない修行者であった時、一心にこう考えたのである。――まことに世間は苦の中にある。生まれ、老い、衰え、死するがまだこの苦より脱出することを知らず、この老死より抜けるすべを知らない。いったいいつになったらこの老死の脱出を知ることができようか。人が人としてある限り、誰でも担っていかなければならない苦しみ、いわば根本苦惱を視つめたのである。それは死ぬこと、年を取っていく苦しみである。そしてその苦しみを克服する道を見つけられた。それが悟りである。

何がありて老死があるのであろうか、これが縁起の公式である。「これあれば、かれあり」

「これなければ、かれはない」いわゆる十二因縁である。無明があるゆえに執着あり、執着あるがゆえに苦あり、あるいは老死があり、苦が生老病死だからである。その苦は執着が

あるからである。執着があるのは存在の真相に対して無明、無智があるからである。「比丘たちよ、わたしは汝らのために、縁起および縁生の法について説こうと思う。汝らはそれを聞いて、よく考えてみるがよろしい。ではわたしは説こう」「大徳よ、かしこまりました」「比丘たちよ、縁起とはなんであろうか、比丘たちよ、生によって老死がある、ということとは如来が世に出ようとも、また生まれとも定まっているものである。法として定まり、法として確立しているものである。それは相依性のものである。如来はこれを証し、これを知ったのである」。

釈尊の悟りとは宗教体験というか自内証というか釈尊自身の心の中でおこなわれたことなので、いふなれば直観である。直観というものは受動態のものなので、向こうから訪れてくるものである。例えば、『正法眼蔵』の「自己をはこびて万法を修証することを迷いとす。万法をすすみて自己を修証するは悟りなり」というようなものである。直観が向こうの方から来る。それを釈尊はお受けになり、それを言葉でもって私どもの為に説かれたのである。

相依性とはすなわち相依り合っているという性質、物には必ず条件があつて、それによって生ずるものである。(例えば葦束二本が支え合つて立っている状態の時、一方を倒せば又、葦束も倒れるよつなものである)。片方が無くなればまた、その一方の対も無くなるというよつなものである。釈尊の出家の主願は生老病死からの解脱である。そして一番問題視したのは三つの苦(苦苦、壊苦、行苦)のなかの

行苦である。要するに無常であれば苦であるということである。存在の不安、生の不安というようなものである。例えば平家物語の冒頭の「節」祇園精舎の鐘の聲、諸行無常(行苦)の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰(壊苦)の理をあらはすは、時の流れとともに色々な物事が移ろっていくことである。形あるものは壊れ、栄える者は滅びるのである。そして、お腹が痛いとか、お腹が空いて苦しいというのは「苦苦」と言われる。要するに諸行無常を一番問題視したのである。そしてこれを悟り、解脱し、説法したのである。人間の教師と言われる所以である。また、如来は道を教える者であると言っている。

#### 四諦八正道

苦諦——人生には、さまざまな苦しみ、不安、苦悩があること

集諦——苦しみはどうして起きるか、それは人間の欲望から起きること

滅諦——苦の不安、苦悩を根本から解決し、克服した境涯

道諦——滅諦に到達するには実践・修行が必要なのである(八正道)

人間には苦というものがつきまとっている。その苦は人間の渴愛・欲望の高ぶりによって引き起こされている。欲望を失くせとは言っていない。欲望の燃えさかるものを失くせと言っているのである。要するに欲望をコントロールできるよつにせよと言っているのである。

八正道

正見——正しい見解(四諦すなわち苦・苦集・苦滅・道)を知ることを知ることを

正思——世俗のさまざまなことを捨てること、怒りが  
ないこと

正語——いつわり(中傷)を離れること

正業——正しい行い(よこしまを離れること)、与え  
ざる物を取らないこと、邪淫を離れること

正命——正しい人間の生き方を守ることを

正精進——悪不善を断ち、善を生ぜしめるため心を奮い  
起こして努力すること

正念——心の置きどころを正しくすること、身心を観  
察してむさぼり、憂いを失くすことを実現す  
ること

正定——禅定を修して内心平等なる境地、いっさいの  
波立ちのない境地

(以下次号)

俳句

誰知らぬ山でりんどう秘めて咲く

ななかまど火の色をして立ち尽くす

春の磯立つ浪騒げ落花の舞

暑き日に熱い声上げるリトルリーグ

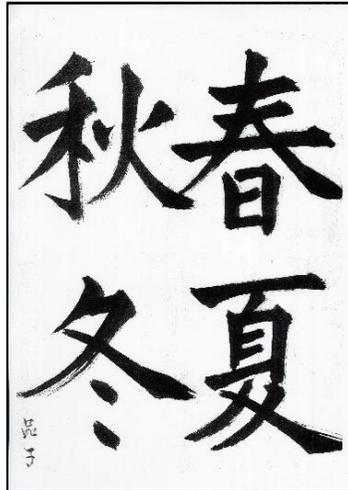
良き汗をかきて横たふ青畳

北の怒涛吠える心かき消して

生きること心が痛い花散りぬ

何ごとも時は流るる芽吹きかな

はかなげに日本情緒を映す萩



書—柴田品子



## 短篇小説―精神科病棟日誌シリーズ③

小野智司

### 選挙

首相就任を目指す池内さんは、選挙を目前に控えた昨今、懸命に活動している。

閉鎖病棟の開放処遇時間になると、病院中を歩き回って会う人ごとに挨拶をして歩いている。朝、病院のバスが入り口に到着するときには、待ち構えていて、降りてくる人たち一人ひとりに、おはようございます、池内宏をよろしく、と大きな声で連呼するし、廊下で行き会う患者には、こんにちは××○○さんなどとフルネームで呼びかける。私も顔を合わすたびにフルネームで呼ばれるが、気持ち悪いからやめてくれと何度言ってもやめない。汚れた白シャツに黒いズボン、首にはタオルを巻き、禿げたすだれ頭をてらてら光らせながら、顔を合わす度に「私の政策はまず血液型による人物評定、次に男子の頭髮制限、そして結婚制度の廃止であります」と大声で絶叫する。

「いつもそんなで疲れない？」と私が訊くと、「いや、これは一種の修行だからね。俺には天命が下っているから」と、当然だと言わんばかりにたんたんと答える。

そんな池内さんだったが、彼の選挙活動は日に日に工スカレートしてゆき、薬の服用量もそれにつれて増えていったようだった。

ある日、私はなんだか哀想に思えてきて、つい、

「池内さん、首相当選おめでとう」と口にしてしまった。すると彼は、

「ほんと？ 俺、ほんとに総理大臣になったの？」と、ぱつと目を輝かせ、晴れ晴れとした表情になって、タオルで汗まみれの顔を拭いた。

私はつい調子に乗って、「総理、さっそく組閣をしなければ。ことは急を要しますよ」と言っちゃった。

しかし、彼は自分が首相になったという巨大な妄想が頭の中でばちんとはじけてしまったようで、急に口元をだらりと緩ませ、よだれを垂らしながら、ああううと言葉にならない声を発してその場にへたり込んだ。

私は驚いて看護婦さん呼びに行き、大変です、池内さんの様子が変なんです、と報告した。そして一緒に池内さんのところに戻ると、臭い匂いがする。あらまあ、この人、便を漏らしてるわ、と看護婦さんは慣れた手つきで、彼の脱糞の処理をした。

現在、彼は病状が重篤だということで、隔離室で完全看護のもとに置かれている。

私は、彼をそこまで追い詰めたのは自分のせいなのではないのかと、罪悪感に捉われている今日この頃である。

## 『リングゴ追分』

「フジムラエミコは、田舎へ来るな、田舎の嫁は、よく働く嫁だ、あああん」とエミコさんはわあわあ泣き出した。

精神科病棟の廊下で私はエミコさんの頭をよしよしと撫でた。

「だから、旦那さんは離婚なんてしないって。こないだも面会にきたじゃない」

「わああん、だって、私、離婚されたんだもん。九州の田舎に旦那だけ帰るんだもん」

「そんなことないって。離婚したら面会になんか来ないよ」

「ほんと？」  
「ほんと」

するとエミコさんは突然、リングゴ追分を陽気に歌い出した。

急勾配のアップ・ダウンの激しさにいつも面喰うが、基本的に人なつこい女性なので、親しみをもつようになった。

娘が二人いて、育児ノイローゼがこの病気の始まりだという。

音痴のリングゴ追分が頂点に達したとき、屈強な男性看護師が二人やってきて、彼女を抱きかかえ、女性病棟に

ひきずっていった。

「ああ、エミちゃん、また保護室ね」別の女性患者が気の毒そうに言った。

翌日、二階女性病棟の下の喫煙所で煙草を吸っていると、泣き声混じりのリングゴ追分が風に乗って聴こえてきた。

## 『血圧計』

老人は8七に角をうった。

「ううむ」僕は、また負けか、とぼやく。精神科病棟での楽しみといたたら、思考障害のない患者との将棋ぐらししかない。本当は囲碁がやりたいのだが、碁石をチョコレートと勘違いして食べてしまうものがあるから、禁止なのだ。

「西岸さん、やっぱり強いですね」

「おらあ、年季がはいるからよお」

「それにしても、その入れ墨、すごいですね」僕は老人のTシャツの腕からのぞいている極彩色の彫り物を指さした。「ちよっとシャツをめくって見せて下さいよ」

老人が肩までシャツをまくと、見事な竜と牡丹の模様が現れた。

「背中もつとすごいことになつとるんやで」

「わかります、わかります」僕はちよっと怖くなった。

「『仁義なき戦い』ん時は、おらあ、××組の援軍で広島にいたんだぜ」

「へえ、あの話、本当だったんですか？」

「まあ、半分は本当だろうな」

「ところで、その歩、自分のだから取っちゃだめですよ」

「ああ、そうか」

「認知症なんじゃないかなあ」

「じゃあ、王手」

「それは玉じゃなくて金ですよ」

「ちよつと待った、眩暈がしてきた」

老人はそう言うと、自分用の機械で血圧を計り始めた。

## 『漂う』

名前を知らないから、山田君と呼ぼう。

山田君は閉鎖病棟のナース・ステーションの横、保護室に通じる閉め切りのドアの前に日がな一日、就寝まで立っている。というか、脱力してゆらゆら漂っている。

観察していると、少し移動するが、おおむね半径一メートル位である。

黒いくせ毛を長く伸ばし、無精ひげが少し、誰と話すわけでもなく、ずっとそうしている。黒縁眼鏡の奥の目はうつろな三白眼だ。

と言って、社交性が全くないわけでもない。

私が近寄って、

「ここ、気持ちいい？」と訊くと、

「ええ、まあ……」くらいは答える。しかし会話は発展しない。

病棟の患者は大体がコミュニケーション不全だから、彼など良い方なのだが、こちらが何を言っても、ええ、まあ、なので、僕もそれ以上話し続ける気になれない。

二週間はそこに立ち続けていただろうか。ある日、おや、と思ったら、彼がそこに立っていない。それきり彼の存在を忘れて患者仲間と将棋を指していると、ぎゃあ、という呻きと、バカヤロウ、という叫びが廊下のほうから聴こえてきた。

なんだなんだとみんなが廊下の奥に集まると、彼がしゃがみ込んでいる。その前で、興奮した患者が、

「俺の部屋の前でうろろ立っていやがって」と怒鳴っている。

翌日から、目に痣をつくった山田君はまた例のポジションに漂っている。

## インユートピックス

### 平塚美術館のクーカ展へ行く

去る9月1日、平塚美術館で開催中の「スタジオ・クーカ」企画展を見学に行きました。

スタジオ・クーカは、平塚市内の障害福祉サービス事業所で、様々なハンディをもった人が、得意技を活かした仕事をすることを目指し、アートをテーマに活動を続けています。大胆で精緻なアートは各方面から高い評価を得ています。

参加したメンバーも、ハンディを抱える人たちが、障害を克服してすばらしい作品を発表していることに感銘を受けていました。



### 将棋を愛する人たち

将棋の藤井3冠の活躍に刺激されたのか、このところインユートでも将棋が盛んになっています。

毎月一回、アマチュア高段者による囲碁・将棋の指導教室も開かれています。



### 編集後記

前号から半年以上空いてしまいましたが、ようやく第7号発刊にこぎつけることができました。

前号以降、ワクチン接種が進んだおかげか、国内の新型コロナウイルス感染者数が急激に減少し、ようやく明るい兆しも見えてきました。来年こそ、コロナを克服し、人と人が笑顔で交流できることを願っております。

原稿をお寄せ下さったメンバー・スタッフの皆さん、ありがとうございました。(ま)